

【 平成 29 年度 学習行動調査 】

1. 調査対象：学年別人数(名) (回収率;%)

所属	学科	1 年	2 年	合計
短期大学部	保育	46 (79.3)	47 (97.9)	93 (87.7)
	食物栄養	33 (86.8)	29 (87.9)	62 (87.3)

2. 調査結果

1) 時間の使い方

授業の予習・復習にかかる時間が「1 時間未満/週」という学生が最も多かった。前年度との比較においては、食物栄養学科は「1 時間未満」の割合が増え、保育学科は減っていた。

全国調査¹⁾では、大学生の勉強時間は 1 日平均 49.6 分(文系 32.2 分、理系 59.6 分、医歯薬系 72.8 分)であり、前年から 3.2 分減少している。

本学では「1 週間の合計時間」で尋ねており、これを 1 日平均とすると全国平均よりもかなり少ない。この傾向は【生活実態調査】の結果からも何え、「意欲がわからない」「学習方法がわからない」学生への対応が急務である。

なお今回は、1 週間の活動時間合計が「1 時間未満」とする学生が最も多くを占める項目、つまり、本学の学生がほとんど関わっていない活動に着目した。これには「社会活動」サークル活動」「読書 (マンガ・雑誌以外)」といった項目が該当している (図 2～4)。

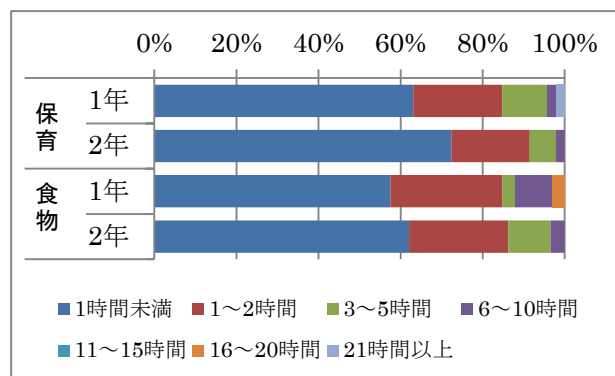


図 1 予習・復習時間

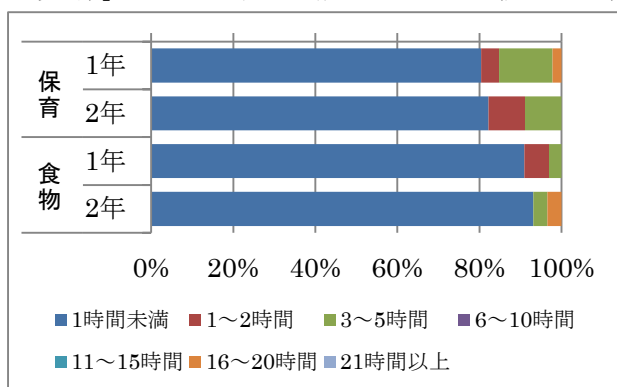


図 2 社会活動

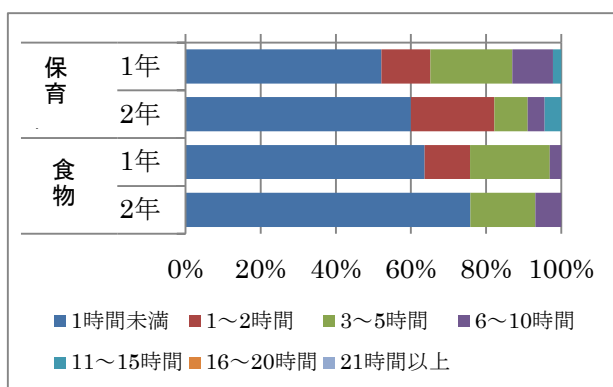


図 3 サークル活動

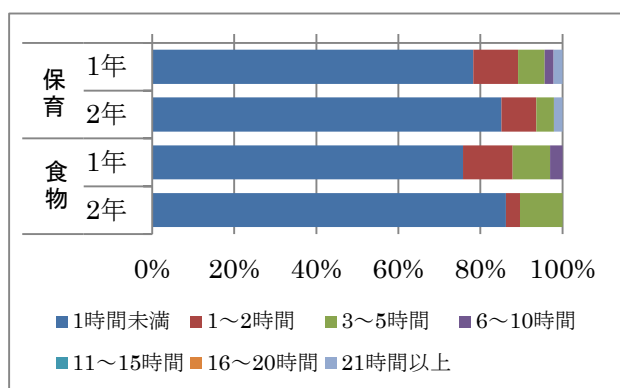


図 4 読書 (マンガ、雑誌を除く)

以上の結果と【生活実態調査 (7 月)】も併せてみると、対外的な活動 (社会活動、サークル活動) に消極的であり、ほとんど読書習慣もない学生が多いと考えられる。

読書時間が短い傾向は全国調査¹⁾でも同様に平均 23.6 分(前年比-0.8 分)と報告されている。この現象は特に読書時間「0 分」層の増加が原因であり、2014 年を頂点として読書習慣のある学生は年々減ってきているということが述べられている。しかし意外にも、読書時間の減少に対するスマートフォン利用の直接的な影響は弱いという結果でもあった。

2) 授業に臨む姿勢

全学科・学年平均で「授業の予習をする」ことに「とても・まあ」あてはまる学生は、24.7%、「復習をする」も26.7%と少ない一方、「課題をきちんとやる(85.3%)」「遅刻をしないようにする(85.4%)」という姿勢を心がけている学生は多い。全国調査²⁾による大学生の意識として「教員から学生への指導を求める意識は、高校までの生活と変わらず『生徒』の感覚が続いている」との指摘があり、好ましい授業態度と、自主的に学ぶ姿勢を両立させるための方策が必要であると考えられた。

3) 双方向的な授業の経験

「以下のような授業を経験したことがあるか」との問いに対し、「教員と学生の間で授業時間内にコミュニケーションが取りやすい」「提出物が教員のコメント付きで返却される」など、アクティブラーニングを意識した授業について、「多く・時々経験している」学生が80%以上を占めた。教員がこうした形態の授業を取り入れ、アクティブラーニングの定着に向け努力している姿勢の表れと考えられた。

特に「グループワークやディスカッションなど協同作業の機会がある」授業の経験率は92.2%であり、調理実習での共同作業や実習科目におけるディスカッションが多いという教育内容の特徴が現れたものと考えられる。ただし、それらを「自分に役立つと感じる」とする学生が83.2%に対し、「楽しいと感じ、やる気が増大する」ととらえる学生は、他の項目より低い62.6%にとどまっていた。しかしながら、自由記載に「たくさんの資格を取る機会がある」「専門的な知識が得られている」というものも見られていることから、2年間という短期間に資格を取得する、という最大の目標を意識した姿勢とも考えられ、必ずしも「やる気が育っていない」とみる必要はないと考えられる。

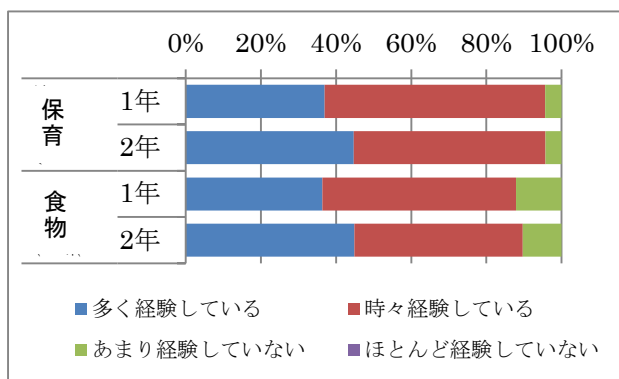


図5 GW やディスカッションなど共同作業の機会がある授業

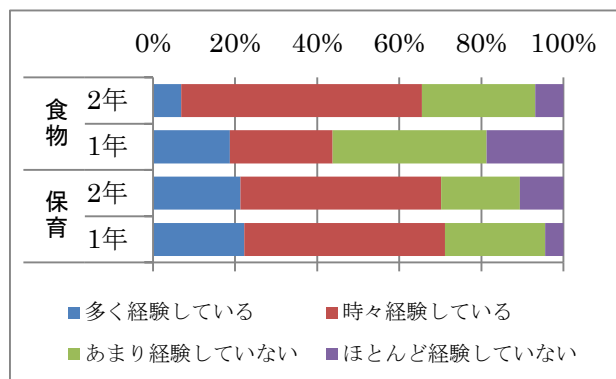


図6 楽しいと感じ、やる気が増大する授業

1) 第53回 学生生活実態調査 <http://www.univcoop.or.jp/press/life/report.html>

2) 2014年大学生の意識調査 <http://www.univcoop.or.jp/press/mind/report-mind2014.html>